

常陸帶

世阿弥作

前

ワキ

鹿島の神職

シテ

里の男

ツレ

(一同) 参詣人

ツレ

里の女

後

ワキ

前に同じ

シテ

鹿島明神

地は

常陸

季は

正月

「かやうに候ふ者は。常陸の国鹿島の明神に仕へ申す者にて候。さても当社に於て御神事さまぐ御座候ふ中にも。正月十一日の御神事をば。常陸帶の御神事と申し候。今日に相当りて候ふ程に。急ぎ社中に相触れ。御神事を執り行ひ申さばやと存じ候。

一 同次第 「是より出でし春の日の。く。宮居の祭いそがん。

シテサシ 「頃は正月の十日あまり。霞みあきらかに日落ちて

万山紅なり。

「同 実に面白や梅が枝に。来居る鶯春かけて。鳴けどもいまだ薄雪の。朝まつりする神垣や。隔てぬ恵み頼むなり。

下歌 「あら有難や此神に。頼みを深くかけまくも。忝や偽りの。無き御心を頼むなり。く。

上歌 「常陸なる。鹿島やいづく水上の。く。常世の波も深緑。苔のむすきが岩船の。出でしも遠き代々

を経て。国豊かなる今までも。誓ひの船に身を浮けて。御影を頼む春の日の。今日長閑なるあしたかな。
く。

ワキ
「時を得て今日の手向か神祭る。正月長閑けき空色の。手向も同じ袖はへて。貴賤群集ぞありがたき。
シテ
「我は又同じ手向の其内に。わきて心も色ふかき。
花田の帶の末長く。契り結ぶの神の御前に。信心をいたして参りけり。

ワキ
「よそ目にはそれとも知らぬ思ひ妻。或ひは花の手向草。

シテ詞
「又は名におふ常陸帶の。面に一首の歌を書く。同じ世をかけて頼まん常陸帶の。結ぶかひある契りなりせば。

下歌地
「神は偽りましまさじ。人やもしも空色の。花田に染める常陸帶の。契りかけたりや。かまひて守り給へや。

「唯頼めかけまくも。く。かたじけなしや此神の。

恵みも鹿島野の。草葉に置ける露のまも。惜しめたゞ恋の身の。命のありてこそ。同じ世を頼むしるしなれ。

ツレ女

「不思議やな手向も繁き其内に。わきて心も色ふかき。花田の帶のうつくしきを。御前に掛けたる不思議さよ。よりて見れば歌を書きたり。同じ世をかけて頼まん常陸帶の。結ぶかひある契りなりせば。心を知れば恋の歌なり。そもそも此手向に恋心を。手向ければ神も受け給ふべきか。返すべくも不審なるぞや。

シテ詞

「嬉しやな今まで。つれなかりける御心の。今はやはらぐ言の葉の。結ぶ契りの末頼もしうこそ候へ。

ツレ

「そも契りの末の頼もしきとは。心得がたき言葉かな。もし人たがへにてあるやらん。

シテ

「何をか包み給ふらん。数書き贈りし玉章の。返事をだにも白露の。身の置き処のなきまゝに。当社

に祈りをかけし身の。今日待ちえたる常陸帶の。我にかごとはよもあらじ。

ツレ 「そもそも契りの末の常陸帶とは。御前に見えたる花田の帶に。

シテ詞 「書く歌占を一番に。詠ぜん人を妹背ぞと。昔より神の御告なり。

ツレ 「昔の事はさもありなん。今は誠を白木綿の。

シテ 「神は末世によもあらじ。唯信仰の誠あらば。今も

威光はよもつきじ。

ツレ 「いやとにかくに言葉づくし。よその人目も恥かして。あらざる方へ立ちのけば。

シテ 「あら情なの御事や。よし我にこそ疎くとも。

地 「神は契りの常陸帶。結びとめさせ給ふべし。恐ろしや疑ひの。神罰あたり給ふな。

「實に疑ひはあらかねの。島根は是か鹿島野の。神の御心頼むなり。ことわり給へ御誓ひ。

シテ「是や此東路の。道の果なる常陸帶の。かごとばかりも逢ひ見んと。人陰にたゞめば。

地「立ちよる陰も人繁き。手向の袖も様々に。神の御祭あがめよ。

シテ「よしとても今日よりは。人も我もむつび月の。袖ふれて寄り来よ。

地「實にや睦月の空なれや。緑立ちそふ青柳の。

シテ「陰ふむ道に休らひて。

地「貴賤の群集おし隔て。

シテ「後影も見えざれば。

地「せん方もなく。

シテ「日も暮れぬ。

地「とにかくに恋はなど。さのみ心を筑波嶺の。このもかのものに道はあれど。恋の道は迷へり。あらう

たて御神。常陸帶かへし給へや。

(中入)

ワキ
「是は不思議の神託とて。宮人数々騒ぎあひ。神慮
を疑ふ人あらば。心中になどか知らざらん。もし
も包まば重ねぐ。其神罰は疑ひあるまじ。悔み
給ふ人々と。参籠の中に触れければ。

ツレ
「思ひ内にあれば色外に顯はれ候ふぞや。あら悲し
や恐ろしや。神慮を疑ふ科により。白蛇の責めを
蒙るぞや。あら悲しの御事やな。

後ジテ
「神は非礼を受け給はず。水上清しや鹿島の波。

地
「御殿しきりに鳴動して。

シテ
「御神楽の鼓灯の影。

地
「和光同塵もかくやらんと。顯はれ給ふぞ忝き。

シテ
「我劫初より此かた。此秋津洲に住んで。其かたち
八尺の白蛇と現じ。衆生の明闇を守り。陰陽のな
かだちと為つて。契りの末や常陸帶の。かごとな
き事を守る処に。汝今更疑ふべしや。

地「疑ふべしや心の馬の。隙ゆく道や神の木綿四手。
結びとめよや結びとめよや。さてこそ契りの常陸
帶。

地「報いは常の世の習ひ。いかに廻るも小車の。すぐ
なる道はかはらじ。たゞ狂へく狂女よ。

シテ
「そもそも恋路に於て。

地「そもそも恋路に於て。憐れむべしや。憐れむべし
や。陰陽の二神くだつて。天の八衢苔筵の。岩枕
を敷島の。波を払ひねぐらを求め。鶴鵠のつばさ
にたぐへ。東西南北諸天善神。十方国土を治めし
より。恋路の源なれや。汝などかは疑ふべきと。
神託あらたに聞えしかば。教への契りの末かけて。
かたじけなしや常陸帶の。結ぶ契りとなりにけり。